

三重県病院協会会報

Mie Hospital Association (MHA)

No. 310 2026(令和8)年1月

新春特集

三重県病院協会理事会から

年頭のご挨拶

理事長

理 事

副理事長

監 事

わが町の病院

ペンリレー

フォト・ギャラリー

三重はふるさと 空中散歩

各種報告 受賞お祝い

三重県病院協会



表紙の解説

題字

揮毫は鬼頭翔雲先生です。先生は日展会員で、今までに特選2回、入選35回、日展で書道部門の審査員に選ばれました。日展の全部門を通じ審査員となられたのは、松阪市ゆかりの人では日本画の宇田荻邨（てきそん）と先生だけだそうです。他に読売書法会常任理事・審査員、中部日本書道会名誉副会長などの要職を務められています。

先生は、明るく気さくなお人柄で、誰からも好かれ、私にとっては30年来お酒と人生の師匠です。今回会報誌の題字をお願い致しましたところ、快くお引き受けいただきました。題字には、「力強さ」と同時に先生のお人柄である「おおらかさ」が表れ、私たちの会報誌を飾るのにふさわしい素晴らしい書であります。

デザイン

表紙の中央に淡い赤、青、黄の三重県地図3枚が、少し重なるようにして並べてあります。三重ですから単純に3枚並べてみたのですが、それが思わぬ効果を生み出しました。

病院は、医師、コ・メディカル（看護師、技術職員）、事務職員の三者が協力して運営していくことが最も大切であります。三色の地図は、三重県全体の医師、コ・メディカル、事務職員の集団を示し、県内のすべての病院では、これから三者が力を合わせて円滑に運営していくことを意味します。今まさにスタートの時ですが、あたかも陸上競技のスタートのように、三者が手をつないでスタートアップしているように見えます。また別の見方をしますと、ちょうど多次の上げ馬のように、馬が三頭、天に向かって飛翔しようとしているようでもあり、これから飛躍をめざす私たちの協会を象徴するものであります。

またこのデザインを利用して、協会のロゴマークも作成しました。

表紙の背景は水色ですが、これは今までの会報誌の青色を少し薄くして引き継いだものです。

（竹田 寛 記）

三重県病院協会会報 NO.310 目次

新春特集 年頭所感（敬称略）

三重県病院協会理事会

年頭所感(2026年)	理事長（伊勢赤十字病院院長）楠田 司	1
年頭所感	副理事長（桜木記念病院理事長・院長）志田幸雄	2
年頭のご挨拶	副理事長（県立総合医療センター理事長・院長）新保秀人	3
年頭所感	理事（桑名市総合医療センター院長）山田典一	4
年頭所感	理事（ヨナハ丘の上病院名誉院長）東口高志	5
つれづれなるままに、、、	理事（市立四日市病院院長）蜂須賀丈博	6
年頭のご挨拶	理事（総合心療センターひなが院長）森 厚	8
“Another One”	理事（山中胃腸科病院院長）淵田則次	8
年頭所感	理事（鈴鹿中央総合病院院長）北村哲也	9
年頭所感	理事（鈴鹿回生病院院長）荒木朋浩	10
新年を迎えて	理事（遠山病院理事長）西村広行	11
医療DX飛躍の年へ	理事（三重大学医学部附属病院院長）佐久間肇	12
年頭所感	理事（県立こころの医療センター院長）森川将行	13
年頭所感	理事（三重中央医療センター院長）下村 誠	13
新年のご挨拶	理事（松阪中央総合病院院長）田端正己	14
年頭挨拶	理事（伊勢ひかり病院院長）堂本洋一	15
年頭所感	理事（志摩市民病院）江角悠太	15
2026年を迎えて	理事（紀南病院院長）加藤弘幸	16
2026年頭所感	監事（吉田クリニック院長）吉田光宏	17
令和8(2026)年の年頭所感	監事（ヨナハ丘の上病院理事長・松阪市民病院顧問）伊佐地秀司	18
わが町の病院	玉城町国民健康保険玉城病院 院長 浦田久志	19
	三重北医療センターいなべ総合病院 院長 相田直隆	23
ペンリレー	鈴鹿回生病院 事務長 岡本 繼治	26
	伊勢赤十字病院 医療ソーシャルワーカー 松葉稚加	28
	熊野病院 地域連携室（認知症疾患医療センター） 今西裕隆	30
	尾鷲総合病院 総務課 地域連携係・医療事務係 係長 松井真路	32
フォト・ギャラリー		
三重はふるさと 空中散歩 松阪市民病院名誉院長 小倉 嘉文		33
報 告		
受賞報告 令和7年度三重県福祉関係功労表彰、看護関係功労者知事表彰		35
三重県病院協会だより		36
三重県精神科病院会だより		37



新春特集 年頭所感

年頭所感（2026年）



三重県病院協会 理事長
楠田 司（伊勢赤十字病院院長）

新春を迎え、皆様におかれましては益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

昨年を振り返りますと、医療を取り巻く環境は一層厳しさを増し、人件費・物価の高騰、人材確保の難しさ、働き方改革への対応など、病院運営にとって試練の年が続いています。病院経営を取り上げても、昨年11月26日に公表された中医協総会での「第25回医療経済実態調査」では医療機関の厳しい経営実態が報告されました。病院全体では62.7%の病院が赤字に陥っており、内訳をみると一般病院では72.7%、療養型病院では53.0%、精神科病院では66.0%が赤字経営となっています。損益率でみると、病院全体では▲7.3%であり、開設主体別では医療法人▲1.0%、国立▲5.4%、公立▲18.5%、公的▲4.1%、国公立を除く全体▲2.9%と2年連続で回復の兆しはありません。

こうした厳しい状況に、政府は2025年度補正予算案で「医療・介護等支援パッケージ」を閣議決定。令和8年度の診療報酬の改定では、医師や看護師らの人事費に回る「本体」部分は30年ぶりに3.09%引き上げる方針が発表されました。改定の基本的視点では、物価や賃金、人手不足等の医療機関等を取りまく環境の変化への対応を重点課題として真っ先に取り上げています。実際、人手不足対策を行う余裕のない施設は少なくないと思われ、特に中小病院では、医療者確保のための広報活動や説明会の開催・参加、奨学金制度の設置、また負担軽減のためのデジタル化・DXの導入、タスクシェア・タスクシフトの推進などは十分進んでいないことが予想されます。規模が小さな施設では資金的余裕や人的リソースといった経営資源が乏しい場合も多く、人材の獲得や職場環境の整備まで手が回らないのが実情です。令和6年の診療報酬改定で新設されたベースアップ評価料の届け出状況を見ても、多くの病院が届け出をしていますが、未届け病院の6割は中小病院です。少ない事務職員に届出のための煩雑な業務を負担させられないうことが主な原因となっています。全国の病院の70%は中小病院ですから、今年の改定が病院運営に十分な余裕を与え、人材確保やDX推進を進める原動力になることを期待したいものです。改定の詳細については中医協での今後の議論が待たれますが、今年6月以降、県内医療機関の経営状況がどの程度改善されるか動向を見守っていきたいと考えます。

当協会としても、今後の医療情勢を注視するとともに県内の病院の運営状況をモニタリングし、医療の質、雇用の質、経営の質改善に資する講習会や研究会をご紹介し、行政や関連団体と連携し、時宜に叶った有用な情報発信に努め、会員病院の未来を切り拓くための取り組みを進めていきたいと考えます。

中国の故事に「同舟共濟」「衆志成城」という言葉があります。同じ舟に乗る者が力を合わせて危機を乗り越えること、志をひとつにし、城のように堅固にして当たれば課題は必ず克服できることを意味します。少子高齢化が進み、医療提供体制の大きな変換点を迎えようとしていますが、会員病院の先生方とさらに意思疎通を図り、連携協力し乗り切っていきたいと考えます。

新しい年が、医療に携わるすべての方々にとって希望に満ちた一年となるよう、心より祈念いたします。



新春特集 年頭所感

年頭所感



桜木記念病院

理事長 院長 志田 幸雄

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

旧年中は、県内医療の発展と地域住民の医療提供のため、会員病院の皆様をはじめ、多くの関係各位の皆様より格別のご支援とご協力を賜りましたこと、心より御礼申し上げます。

昨年は、医療需要の多様化と人材確保の難しさが一層顕在化する中、経営効率化と質の高い医療提供の両立が求められる一年でございました。

本協会におきましても、診療報酬改定や医療DX推進への対応、エネルギー、物価高騰への経営的対策など、持続可能性を支える取組を進めて参りました。

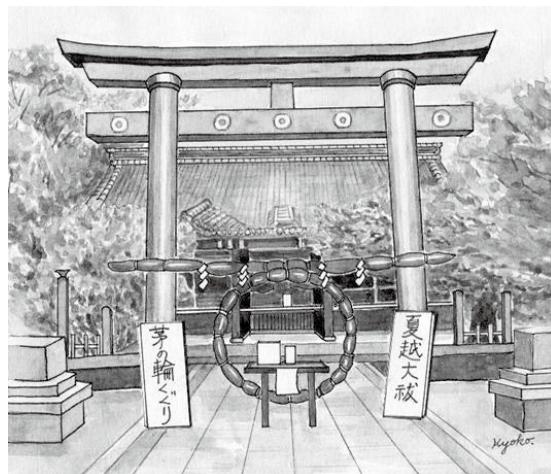
本年は、高市政権のもとで進められる医療・福祉政策の転換期を迎えます。診療報酬や介護報酬の見直し、新たな地域医療構想において、外来や在宅、介護との連携等も含めた医療提供体制構築の検討、そして医師の働き方改革の本格運用など私たち医療現場にとっても大きな変化の年となります。

少子超高齢者が一層進む中、「治す医療」から「治し、支える医療」へのシフトは避けられません。県内の病院がそれぞれの機能を最大限に発揮し、在宅、介護、福祉との連携強化することが地域の安心を守る鍵となります。

私たちは、政策の変化を的確に捉え、現場の声を国や県に届けると共に、医療従事者が誇りを持って働ける環境づくりに努めて参ります。

本年も、皆様のご健康とご多幸を心よりお祈り申し上げ、新年のご挨拶と致します。

令和8年 元旦





新春特集 年頭所感

年頭のご挨拶



三重県立総合医療センター

理事長・院長 新保 秀人

皆様、新年あけましておめでとうございます。本年も楠田理事長を支えながら三重県の医療がよりよく展開できるように私も微力ながら努めて参りたいと考えております。ご指導ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

全国の多くの病院が赤字となり、公的な支援の必要性が叫ばれています。赤字になれば病床数も減少し、医療費抑制につながるという厚労省の狙いは的中した感もありますがまともな医療もできない状況につながりかねない大幅な赤字は想定外であったかもしれません。当院も小手先の対策では対応できないレベルの収支バランスになっており、正しいことを正しくやっていくしかないと腹を括って頑張っていく所存です。当院では診療科の体制が変更になり、新しく手術を開始する診療科も増えました。それなりの投資も必要ですが、未来に向けて希望をもってやっていこうと思っています。

全ての私事になりますが、私は学生時代ずっとサッカーをしておりまして大学でもサッカー部に所属しておりました。大学での部活の思い出といいますとやはり西医体となります。副主将をしていたときにベスト8になり、結局これが私が大学時代の最高の成績でした。翌年主将をしていた時は相当練習を厳しくして成績アップを狙いましたがうまくいかず、しょぼい結果に終わりました。そんな母校のサッカー部ですが昨年の西医体で優勝、さらにその勢いをかけて全医体でも見事優勝という快挙を成し遂げました。私はサッカー部OB会の会長を仰せつかっていることもあり、優勝祝賀会にも出席しそこで試合の一部を画像で見せてもらいましたが、我々の時からは技術も戦術も格段に向上していて心底驚きました。しかしながら優勝までの足取りは全く平坦ではなくPK戦での勝利や押し込まれながらも辛くも延長にもつれ込んでなんとか決勝点を挙げての勝利などかなり劇的な展開であったようです。とりわけ全医体決勝戦の筑波大学戦では延長になってから相手のシュートがゴールポストにあたって得点にならずに済み、その跳ね返ったボールをそのまま味方の前線に送ったところ拾うことができて、シュートに繋げ見事にゴールとなり、そのまま逃げ切って優勝をつかんでいます。今更ながらですが何事も諦めないことが大切なのだと後輩たちに諭された感じです。

本題に戻ります。今後も当医療センターの特色を生かしつつ地域の皆様や医療機関に信頼される病院として、職員が一丸となりまして医療レベルの向上に努めて参りたいと存じますので緒先生方のご支援、ご指導を宜しくお願い申し上げます。本年もよい一年となりますことを心より願っております。



新春特集 年頭所感

年頭所感



桑名市総合医療センター
病院長 山田 典一

新年あけましておめでとうございます。皆様におかれましては健やかに新春をお迎えのことと存じます。また、日頃より当院の運営に対し多大なるご支援とご協力をいただき、厚く御礼申し上げます。

昨年を振り返りますと、物価高騰に伴い医療材料費や人件費、光熱費など病院の支出ばかりが増加し、病院経営には非常に厳しい年となりました。その後、女性初の高市総理が誕生し、補正予算での病院支援や本年度の診療報酬プラス改定が決ったとはいえ、まだまだ支出増を補うには心もとないのが実情です。さらなる収益増へ向けた取り組みが引き続き必要との思いを強くしております。

当院の近況につきましては、昨年、働き方改革の一環として、一部の診療科ではチーム制を導入し、「処置及び手術の休日加算1、時間外加算1及び深夜加算1」を取得することで緊急手術に対応したスタッフにインセンティブを付ける試みを始めました。今後、見直しは必要ですが、医師の時間外勤務削減には一定の効果がありそうです。また、昨年は1年間通して稼働率の低迷が問題となりました。ベッドコントロール機能強化を目指し、ベッドコントロールチーム、地域連携室、入退院支援室、患者相談室を一つにまとめ、患者支援センターを新たに立ち上げました。また、今年は当院にとって医療DX元年ともいえる年になりそうです。すでに三重大学と協定し、PHRのNOBORIを導入して患者さんからは高評価をいただいておりますが、働き方改革推進のための職員の業務負担軽減には寄与できておりませんでした。すでに導入された病院からは導入後の業務時間短縮効果を伝え聞いてはおりましたが、遅ればせながら当院でも今年の2月には全病棟でバイタル連携システムを稼働させ、看護記録業務の効率化を図り、より患者ケアに注力できる環境を整えます。3月からは電子カルテに生成AIを導入し退院サマリや看護サマリ、診療情報提供書の作成に要する時間短縮を図る予定です。4月からはPHSをスマホに刷新し連絡業務の円滑化を図ることになっております。さらに医療DXを活用した病診連携の質向上を目指してまいります。今後も桑員地区の医療向上に職員一同尽力してまいりますので、ご指導ご支援のほど、よろしくお願ひ申し上げます。本年が三重県の医療ならびに皆様にとって、実り多き一年となりますことを祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。



新春特集 年頭所感

年頭所感

社会医療法人尚徳会ヨナハ丘の上病院名誉院長
ヨナハ丘の上在宅医療センター センター長
東口 高志



新年明けましておめでとうございます。皆様方におかれましては健やかな新年をお迎えのことと心よりお慶び申し上げます。

2021年11月に総合病院とヨナハ産科小児科病院を併合してヨナハ丘の上病院を開設させていただき、無事に4年が経ちました。ひとえに皆様方のご厚情とご支援の賜物と心より感謝申し上げます。昨年は、法人開設50周年も迎えることができ、「ヨナハ創立50周年記念祭」を開かせていただきました。開院がコロナ禍でしたので開院式も社会へ向けての規模のものではなかつたため、この機に市民の方々へのお目見えを込めての開催となりました。幸いにも予想を超えるご多くの方々に来院いただき胸をなでおろしているところでございます。一方、2021年4月から開設しました在宅診療部門・在宅医療センターも徐々に対象患者様が増え、桑員地区における地域医療の発展に少しでもお役に立てればと地道にコツコツと足搔いている日々です。2025年～2026年にかけての年末年始におきましても、緊急在宅診療のご依頼が増加してまいりました。桑名市には本年の干支であります「上げ馬神事」で有名な多度大社がございます。元々鈴鹿の生まれの私はお正月の初詣には地元の氏神さんとお伊勢さん（皇大神宮）にお参りするのが慣習でした。桑名では「石取祭り」で有名な桑名総社（春日大社）と多度大社が皆様よくいかれる初詣先であることを知りました。多度大社は多度山（標高403m）を神体山として5世紀後半の雄略天皇の御代に創建された古社で、北伊勢大神宮とも呼ばれています。この多度大社近辺は在宅診療の訪問範囲内にあり、数名の患者様を診させていただいております。そこで患者さんのご家族様から年末年始に何かあったらどうしよう？救急車も通れません。と不安げな一報が入りました。当初意味がわからず途方にくれましたが、後にそれほど多くの参拝者がお越しになるので車が入れないことを危惧されてのご不安だったとわかりました。お伊勢さんの大渋滞は良く知れていますが、多度大社は参拝道は一本しかなく、渋滞は必須で数時間は動けない可能性がありました。年が明けて初の訪問診療にお伺いしましたころ、既に年明け1週間は過ぎているのですがいまだ渋滞でかなりの時間を要しました。土地土地で色々な事があるのでなあと感嘆した初訪問でした。

長々と私事も含めて記させていただきました。昨年も先生方には数々のご教示を賜り、誠にありがとうございました。本年も引き続きご指導・ご鞭撻のほど何とぞよろしくお願いい申し上げます。



新春特集 年頭所感

つれづれなるままに、、、

四日市市病院事業管理者 兼 市立四日市病院院長
蜂須賀 丈博



みなさん、あけましておめでとうございます。令和7年4月に四日市市病院事業管理者兼市立四日市病院院長を拝命した蜂須賀丈博と申します。楠田理事長よりご指名を受けましたので、自己紹介も兼ねてつれづれなるままに思いを書き綴りたいと思います。

私は、昭和35年（1960年）に愛知県一宮市に生まれました。今上天皇と誕生日が2日違いで、光栄にも同学年となります。一宮の実家は、よくある農村の集落にあり、周りはほとんど田んぼで、牛を飼っている農家もありました。もちろん当時は塾などもなく、今から思えば自由に育ったなと思います。小学校6年の1月両親が突然一宮高校が学校群になるらしいので滝中学を受けると言い始め、言われるがままに試験を受けました。今や母校は医学部予備高校ともいえるくらいに医学部入学生が多いようですが、当時はのんびりしたもので、確か250人受験して225人合格するという状況でした。中学に入るとバスケットボールに熱中し、しごきともいえる先生の罵声に耐えながら練習しました。今では考えられませんが、「絶対水を飲むな！」と言われ、友達とかわりがわりに壁を作つて水道の蛇口をひねったことが懐かしく思い出されます。あれは何だったんでしょうかね。大学に入ってから飲んだゲータレードとの差は歴然でした。1978年幸運にも名古屋大学に入学し、今度は屋外スポーツをやろうと思い立ち、アメリカンフットボール部に入部しました。医学部生は私と同級生のK君だけ。他は他学部の方たちで、特に工学部の方が多く、実業界で皆さん活躍されています。現在もOBとしてお会いする機会があり、交友を続けています。少しきはクラブに恩返しをと思い、60歳を過ぎてからチームドクターもさせていただいています。

1984年に大学を卒業し、医師となりましたが、何となく向いてそうだからと外科医になりました。地元の市民病院に入職し、手術に明け暮れる毎日を過ごしました。独身でしたし、時代もみんなで楽しく仕事をして遊ぶ時代でしたので、自分にはいい時代だったなと思います。1988年結婚し、同時に名古屋大学第二外科に帰局しました。なぜか、移植研究室に入り、臓器保存を研究テーマとし、何とか学位を取得しました。しかしながら、何となく大学の生活になじめず、動物実験はもういいやと感じ始めた1992年の春、T教授から「四日市に赴任して腎移植を始めよ」との命を受けました。四日市という場所は、名古屋の人にとっては少し不思議な場所です。私も学生時代、四日市出身の友人に誘われ2回ほど四日市カンツリー倶楽部でゴルフをして、近くでいいところだと感じていましたが、いざ仕事となると話は別で、「なんか非常に遠いところ」と感じさせる不思議さがあります。岡崎とほぼ同距離のはずですが、ずっと遠い感じがするのです。この感じは、今の名古屋人にとっても全く変わっていません。

四日市に赴任したのが、1993年1月ですからすでに30年以上の月日が経ちました。考えた

ところでどうしようもないので、ひたすら手術に明け暮れました。94年に腎移植を開始し現在までに97例を施行しました。目の前を通り過ぎて経験させてもらった症例は約4万例となります。一生懸命やっていると不思議な出会いがあるので、95年に鼠径ヘルニアのメッシュプラグ法に出会い、専門家のいなかったCommon diseaseであるヘルニアの分野のめりこみ、現在は一般社団法人日本ヘルニア学会の理事長を務めさせていただいている。会員数2000名を超える学会となり、今年の11月にはアジア太平洋ヘルニア学会という国際学会を大阪で開催させていただきます。この30年以上の間に50名近い外科医の卵たちと出会い、一緒に成長させてもらいました。皆なにがしかの専門家や地域の開業医となり活躍する姿を見るのは、何にも代えがたい幸せです。3月末には、お疲れ様会を開いていただき、多くの職員やOBの皆さんとパーティーを行うことができました。

数日後、無事定年退職を迎えることができましたが、翌日現在の職に四日市市長より任命されました。その時身の引き締まる思いと同時に、とんでもない状況を引き継いだもんだという思いが駆け巡りました。その思いは、年度末が近づき、来年度予算編成が始まる今、さらに強くなっています。医療業界は、歴史的に見て初めての困難に遭遇しており、誰もこのマイナス成長を経験したことありません。医療以外のほかの業界がバブル崩壊後に経験した困難と同じ状況が、今医療界全体を取り巻いています。なかなか糸口が見つかりませんが、ここは原点に返り、質の高い医療を提供することを目指すよう、職員全体に訓示しています。実は名古屋大学アメリカンフットボール部の恒例で、OB訓話というものがあり、現役学生諸君に何かためになることを社会経験のあるOBが話す機会があります。2年前のこの会にお呼びいただいた際に話した言葉は、「人生は基本ランニングプレー、時にパスプレー」でした。目立たない1ヤード1ヤードのランニングプレーを地道に続けていると、なぜか時に長いパスプレーが通じて勝利に導かれるということです。おそらく今の医療も同じ状況ではないかと思います。うまくいくかどうかはだれにもわかりませんが、地道に目の前の仕事を続けていくときっと成功が見えてくると信じています。

人生というものは、終わってみれば早いのですが、1日1日は意外と長いもので、時につらくなっています。そして、うまくいくと思ったことがうまくいかなかったり、いやいやながらも続けていたことが、思いもよらぬ幸運をもたらすこともあります。高校の漢文の先生（確か鉄人と呼ばれていた、剣道八段の師範）が教えてくれた中国の有名な言葉が私の座右の銘です。「人間万事塞翁が馬」今の困難な状況は、もしかすると未来の幸運につながるかもしれない信じて、毎日を過ごしていきたいと思います。





新春特集 年頭所感

年頭のご挨拶

総合心療センターひなが

院長 森 厚



謹んで新春のお慶びを申し上げます。病院協会会員の皆様方におかれましては素晴らしい年になりますよう祈念いたします。当院は令和8年3月11日に創立70周年を迎えます。

これもひとえに、長年にわたりご支援くださった皆様、そして地域社会の皆様のお力添えの賜物と、心より感謝申し上げます。

当院は昭和31年に精神科単科病院として四日市市日永の地で開院しました。168床でスタートしましたが、時勢に乗り昭和59年には646床まで病床を増やしました。

その後平成8年に精神科急性期治療病棟の承認、平成10年に精神科救急医療システム事業への参加、平成15年に精神科救急入院料病棟の承認、と精神科救急医療の実践に取り組んで参りました。平成22年には精神科救急医療の要件で社会医療法人として認可していただきました。急性期に集中した治療をおこなって、早期に退院していただくという方針により、長期入院の患者が減少し、病床も480床まで減らしております。

これからも皆様のご期待に応えられる病院であり続けるよう、より一層の努力を重ねてまいります。今後とも、変わらぬご支援とご指導を賜りますよう、お願ひ申し上げます。

“Another One”

山中胃腸科病院院長

淵田 則次



新年明けましておめでとうございます。1年を階段に例えるとすれば、2025年という一年は例年に比べ小さな路面、高い蹴上の階段といったところでしょうか。不安定で登りにくく一段という感じでした。団塊の世代が後期高齢者になるという以外に、社会情勢の変化、不安定な経済をはじめ大手企業の賃金の値上げや物価の高騰が間接的、直接的に病院の経営に大きな暗い（赤い？）影を落としました。年末に国会で承認された補正予算により一時的な止血処置がなされたかも知れませんが、根治療法は6月に行われる診療報酬を待たなければなりません。

少子化対策が叫ばれているにも拘わらず、2025年の出生数は前年に比べ3.0%減の66.5万人になる見通しと日本総研は発表しています。日本人口は減少、とりわけ労働人口が減少しています。医療関係職種の人材の確保が必要です。1980年代に旧文部省が知識量偏重型の詰め込み教育から思考力を中心としたゆとりある教育を目指した方針を示しました。現在の医療・介護の中心的な役割を担う20代から40代にかけての人たちは、いわゆる「ゆとり世代」の人達で指示待ち人間が多いようです。それを踏まえ、次の世代の人たちの教育と指導、増え続ける仕事を効率良く進める体制を整備する必要があります。2025年問題と同様に、今まで経験したことのない時代に、試行錯誤をしながら、2040年に向けての具体的な策を更に押し進めてゆかなければなりません。

この先はどんな階段になるのか。楽に昇れるのか、厳しいものなのか。新年早々、太平洋の向こうアメリカ大陸での騒々しい事件が報道され不安が募ります。我々はお互いの心を一つにして、息切れを起こさないよう上って行きましょう。



新春特集 年頭所感

年頭所感



鈴鹿中央総合病院 院長
北村 哲也

新年あけましておめでとうございます。三重県病院協会の皆様におかれましては、健やかに新しい年をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、昨年中は大変お世話になりましたことにありがとうございました。薬剤費や医療機器の高騰もあって医療経営が厳しい中、なんとか乗り越えることができました。急性期型病院にとって補正予算による緊急補助金は一時的に救われた感がありますが、いずれにしても診療報酬改定での持続的な支援を期待しているところです。

当院においては、管理職メンバーの大幅な更新があり、副院長、事務長などの交代がありました。また、リウマチ膠原病内科、形成外科外来や中央検査科の新規開設など地域のニーズに応じて、診療レベルの向上にも努めてまいりました。専門医のアドバイスを受けながら、チームで支えあいながら診療できる体制を構築しています。医療人材の確保で苦しみながらも、看護師特定行為研修が順調にすすみ、クリニカルパス見直しやPatient Flow Managementを十分に活用したタスクシフトによる働き方改革で医師の長時間残業を抑制することができました。

今後はタスクシェアした職員の業務負荷軽減や、患者様サービスが必要となってくると考えています。折しも医療DXの進歩は無視できない状況で、昨年ようやく導入できた院内Wi-Fiシステムを活用した患者説明用ICツールの運用を発展させていきます。更に病床管理支援システムを用いて入院状況の可視化を計り、人海戦術で行っていた退院調整を適正化していきます。また、治療方針や看護計画の適正化を計り、文書作成の負荷軽減のためのAI導入へと進めていきたいと考えています。若いスタッフの柔軟なアイデアにはついていけず、既に取り残された気がしますので応援で頑張るつもりです。

行政から指導のあった救急医療に関しては、ほぼ断らない救急まで達することができました。本年はこの鈴鹿・亀山地区救急医療の充実とともに、地域がん診療連携拠点病院としてがん診療にも注力していく所存です。複雑化してきたがん治療に対応すべく化学療法室の充実、放射線治療器の更新や、ロボット支援手術の導入など、多くの方々にご支援を賜りながら地域のために精進してまいりたいと思います。

今年は丙午の年であり、自分事としては還暦を迎える節目となっています。

環境の変化についていくのが必死ですが、少しでも皆様の支えとなれるよう馬車馬のごとく汗水かいて働いてまいります。皆様にとって良い年でありますよう、本年もよろしくお願ひ申し上げます。





新春特集 年頭所感

年頭所感

鈴鹿回生病院 院長
荒木 朋浩



新しい年を迎えるにあたり、皆さまに心よりご挨拶申し上げます。日頃より鈴鹿回生病院の医療活動にご理解とご協力を賜り、誠にありがとうございます。地域の皆さま、そして日々連携くださっている開業医の先生方や関係機関の皆さまのお力添えのもと、私たちは一年を重ねるごとに少しづつ成長を続けることができました。

さて、2025年は、多くの医療機関にとって極めて厳しい一年でありました。物価・人件費の高騰、医療従事者不足が重なるなか、病院経営はかつてない困難に直面しました。年末には、病院経営の厳しさを踏まえた緊急的な補助や、次期診療報酬改定において+3.09%という改定率が示されました。決して十分とは言えないものの、わずかながらも明るい兆しとして受け止めております。

このような厳しい環境下において、私たちは改めて「地域のために病院として何ができるのか」を問い合わせました。まず、コロナ禍でいただいた補助金を地域へ還元する取り組みとして、新興感染症にも対応可能な陰圧室を備えた救急外来の増設を行いました。また、鈴鹿地域においても高度医療が受けられる体制を整えるため、ロボット手術を導入いたしました。

さらに、地域医療構想において鈴鹿地域では回復期病床の不足が指摘されていることから、医療を地域内で完結できる体制を目指し、回復期リハビリテーション病棟を新設しました。加えて、入院前から退院後まで切れ目のない支援を行うため、患者支援センターを開設し、シームレスな医療提供に努めています。

2026年は丙午にあたり、「情熱とエネルギーに満ち、大きな変化と飛躍の機会に恵まれる年」とされています。昨年までに蒔いた種を本年こそ花開かせ、より一層、地域に必要とされる病院へと成長していきたいと考えております。病院理念である「生命へ奉仕」を胸に、歩みを止めることなく挑戦を続けてまいります。

また、職員に対しては、女性が働きやすい医療機関としての認定を取得し、現在は三重とこわか健康経営カンパニーにも取り組んでおります。患者さんからは「この病院を受診してよかったです」、職員からは「この病院に就職してよかったです」と言っていただける病院を目指し、地域医療の未来を支えてまいります。

本年もどうぞ変わらぬご指導、ご鞭撻、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。





新春特集 年頭所感

新年を迎えて



特定医療法人同心会 遠山病院
理事長 西村 広行

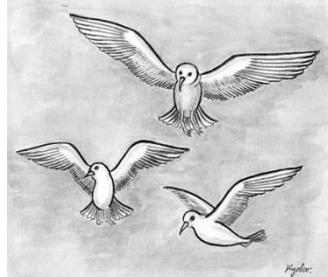
新年あけましておめでとうございます。昨年も、三重県病院協会の皆様方には大変お世話になりました。本当にありがとうございました。当院では、昨年はいろんな動きがありました。主なところでは、創設70周年、6回目の病院機能評価認定更新、地域包括ケア病棟43床に増床、公示病床20床削減などです。個人的には、万博にはまった年でした。非日常の高揚感が沸き立ち、スタッフのホスピタリティーに魅了され、お気に入りスポットとなっていました。（4回しか行けませんでしたが）今年は、6月から実施される新診療報酬への対応、訪問診療部門では在宅療養支援病院への格上げ、医療DXの促進、より良い職場環境作り等に取り組むつもりです。

この先の日本は、高齢者が増え、若者は減り、働き手が不足します。医療界では外来医療は減り、在宅医療対象者は増えます。地域に応じた対応も必要です。「さあどうする？」これを考えましょう、と言う新地域医療構想が進行中です。2040年を目指した、地域のニーズに応じた医療体制作りです。2040年頃、65歳以上の高齢者は約4000万人とピークに達します。

（総人口の36%）生産労働人口は今より約1300万人少なくなります。減少する若い世代が、増加する高齢者を支えなければならない（2040年問題）時代はもうそこまで来ています。働き手人口の減少に伴い、医療従事者の確保もますます困難となる中、働き方改革も進めていく必要があります。どうしたら良いのでしょうか？

医療や介護を必要とする85歳以上の高齢者が増加、2040年にかけて、85歳以上の救急搬送は75%増加、85歳以上の在宅医療需要は62%増加することが見込まれています。入院については、病床利用率が低下傾向にあり、外来医療の需要はすでに減少傾向にあります。地域ごとに人口変動の状況が異なり、求められる医療提供体制のあり方も様々です。三重県もしかりで、地域差が顕著です。こういった現実を踏まえ、遠山病院では、数年前から「コミュニティホスピタル」構想を進めてきました。医療をとりまく将来像を見据えて、引き続き邁進したいと考えております。

今年は診療報酬改定の年となります。すでに概要は出そろっています。昨今の厳しい病院運営を踏まえて、さすがに国も動き始めてくれました。しかし、改定内容に振り回される事無く、「やさしさと思いやりにあふれ、質の高い医療を提供する」と言う遠山の精神を、大阪万博のテーマであったように、脈々（ミャクミャク）と受け継いで参ります。今後も、この事を日々心して、地域医療に貢献していく所存でありますので、本年もご指導・ご協力をよろしくお願い申し上げます。最後に、今年が皆様にとりまして良き年でありますよう、心からお祈り申し上げます。





新春特集 年頭所感

医療DX飛躍の年へ

三重大学医学部附属病院長
佐久間 肇



三重県病院協会の皆様、新年あけましておめでとうございます。三重大学医学部附属病院を代表し、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。

今後、2040年を見据えた「新たな地域医療構想」の策定が進められますが、その背景には人口減少と高齢化に加え、医療を支える若い現役世代が急減するという構造的な課題があります。限られた人的資源で地域医療を守るために、医療DXを推進し、効率化と生産性の向上を図ることが不可欠です。

三重大学では、三重県・地域医療介護確保総合基金による「県内病院間のシームレスな医療情報連携に向けた医療DX基盤の整備」を進めておりますが、令和8年には三重県内の病院を安全な専用回線で結び、紹介・逆紹介に関わるFAXや光ディスクによるDICOM画像の受け渡しを完全電子化するシステムが、いよいよ稼働いたします。

これにより、紹介や転院に関わる情報伝達の即時性が高まるとともに、ペーパーレス・メディアレス化によって現場の業務負担が軽減され、三重県内の医療DXは新たなステージへと進むことになります。本年が、この新たな基盤のもと、会員病院の皆様との連携が一層深まる一年となりますことを祈念し、年頭のご挨拶とさせていただきます。





新春特集 年頭所感

年頭所感

三重県立こころの医療センター

院長 森川 将行



新しい年を迎え、本年もよろしくお願ひいたします。最近、AI（人工知能）を使っている人が、私の周りでも多くなってきたと感じるので、心のつぶやきを書いてみました。ある患者さんが、久しぶりに私の外来に来た時に、「すぐに予約が取れずに大変でした」と言われたので、「この間どうやって乗り切ったのですか」と尋ねると、「AIに悩み事を聞いてもらい救われました」と語った。そういえば、テレビでAIを恋人にしている人たちのことが放送されていたことを思い出す。ずいぶん前に精神科医の仕事はAIでは置き換わらないという報告があったが、安心できないかもしれない。一方で、配偶者の言動に悩まされている患者さんが、「AIは良くないですね」という感想であった。理由を尋ねると「最終的に離婚を勧められたので」と、なるほど本人は別れるための相談をしたいのではなく、この苦境をどのように乗り切ったら良いのかという相談をしたかったようで、「結論を聞いて相談するのをやめました」と語った。しかし、聞き方をかえれば、また違うアドバイスだったのかもしれない。

医局の英語論文の抄読会も、最近の若者はAIに翻訳、要約させてそれを発表するよう、自分が若いころに1週間ぐらいかけて必死に訳していたことを思い出して、なんと便利な事かと思う。しかし、この便利さは何かを失わせてはいないかと心配になる。現代人はストレスに弱くなつたと言われて久しい。ある知り合いの精神科医が、昔は真夏の暑い時にはクーラーがなく、風鈴の音やうちわを使う、窓をあけて蚊帳を使うしか方法がなかつたが、今は建物の中に入れば涼しい快適な世界となつていて、過去のように我慢をすることが明らかに減つていると聞かされ、思わず納得した。新年早々恐縮ですが、アナログな私としては、病院協会の皆様とface to faceでの連携に努めてまいりますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

年頭所感

三重中央医療センター

院長 下村 誠



新年あけましておめでとうございます。今年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。昨年年始はインフルエンザが猛威をふるい地域全体の医療施設が満床で長期入院患者の転院が進ない状況が続きましたが、今年は感染症による入院患者が少なく後方支援病院への退院

（転院）が増え、記録的に低い病床利用率からの仕事始めとなっています。会員皆様のご施設の状況はいかがでしょうか？コロナ以降地域の医療情勢は年々劇的に激動し、病院経営のかじ取りは本当に大変です。地域医療構想的にもいったい急性期病床は足りているのか？不足しているのか？わからなくなります。多くの急性期病院では病床利用が低下し物価・エネルギー価格の上昇で経営状況は厳しさを増しており、厚労省は補助金を出して急性期病床を減らそうと画策しています。当院が担当する結核などの感染症や周産期医療、救急医療といった社会的要請の高い医療は病院経営によっては大きな負担となっています。今回の改定率は3.09%と高くなつたことは好材料ですが、職員の待遇改善が前提の上昇ですので手放しでは喜べません。いずれにしても当院はこれからも津地区の急性期拠点病院として地域医療を守っていく所存です。引き続きご支援のほど宜しくお願ひ申し上げます。今年1年が午くいく年になりますよう祈るばかりです。



新春特集 年頭所感

新年のご挨拶

松阪中央総合病院 院長
田端 正己



新年明けましておめでとうございます。会員の皆様におかれましては、爽やかな新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、2020年1月に我が国で第1例目が確認された新型コロナウイルス感染症ですが、当初は感染すると命にかかわると恐れられましたが、次第に弱毒化、収束化へと向かい、2023年5月には季節性インフルエンザと同じ「5類感染症」へと移行しました。それとともに各種の制限が順次緩和され、昨年はようやくコロナ前と同様の社会生活、日常生活を送れるようになりました。三密（密閉、密集、密接）の回避や、不要不急の外出・イベント開催の自粛はもう遠い過去の出来事のようです。しかし、病院は未だコロナ前の状況には戻ってはいません。言うまでもなく、病院内でコロナウイルス感染が発生すると、基礎疾患有する患者さんや免疫力が低下した患者さんが重症化する可能性があり、また職員に感染が拡がると、病院の機能が維持出来なくなるからです。このため、病院内マスク着用、面会の時間および人数制限といった感染対策は、まだ当分の間、継続する必要がありそうです。

一方、昨年は全国的に病院の赤字や経営危機が大きく報じられた年でした。

厚労省の「医療経済実態調査」では2024年度、一般病院の実に72.7%が赤字だったと報告されています。2020年度～2023年度はコロナ補助金が本業の赤字をカバーしていましたが、2024年3月末でコロナ補助金制度の終了したことによって、本業の赤字が一気に表面化しました。2026年度の診療報酬改定では全体で2.22%のプラス改定にはなりましたが、この程度のアップでは、人件費、材料費の上昇分を補えないのは明白です。本年も厳しい病院経営が続くことが予測されますが、職員一同、力を合わせてこの難局を乗り切りたいと考えています。

理事の先生方をはじめ、会員の皆様にはご支援、ご協力賜りますよう何卒宜しくお願ひ申し上げます。





新春特集 年頭所感

年頭所感

伊勢ひかり病院院長

堂本 洋一



あけましておめでとうございます。令和八年は丙午、情熱や変化を象徴する年で、生命の力強い成長段階を意味します。伊勢ひかり病院は開設4年目を迎え、まさに停滞を打ち破る変革の絶好の年としたいものです。

私は、令和4年に三重県病院協会の理事にさせて頂きました。現在、確率の高まっている南海トラフ巨大地震対策として、故竹田寛前理事長から、災害副委員長の担当を受け、現楠田理事長からも継続をさせてもらっています。当初、各理事の先生方にもアマチュア無線免許を取得していただく計画でしたが、今は各病院の災害対策委員会の職員を主に取得して頂く方向で進めています。すでに令和8年度の県の予算で、10病院には病院設置用のアマチュア無線機セット一式が設置できる事となりました。現在、病院BCP研修会は、三重大大学工学部教授・川口淳先生と三重県医療保健部医療政策課事務局の方と私で、各医療圏の2順目の講演を再開しています。昨年9月26日には、南海トラフ地震の発生確率が80%から、「20~50%」または「60~90%程度以上」という2つの確率が併記され、その不確実性の表現となりました。短期監視では相対的に高まったと判定されます。通信が絶たれた病院では”孤立”し、無線が命の音です。複数の代替通信手段の確保は必要ですが、乾電池でも通信可能なアマチュア無線免許は、最後の命綱となります。各病院におかれましても基地局を設置していただき、参加していただきたいと思っています。本年より、災害非常無線訓練をしたいと企画しております。発災直後からの超急性期に、病院と無線局を結ぶ“命のネットワーク”「三重県病院協会災害無線ネットワーク」の構築の御協力を切にお願申しあげます。

年頭所感

志摩市民病院 地域医療医務監

江角 悠太



あけましておめでとうございます。昨年はのろ志、当院ともに大変お世話になりました。本年もよろしくお願ひいたします。一昨年、当院では経営も悪くなく、医師確保も徐々に安定してきた中、指定管理制度の話が急に出て、現場職員、市民共に混乱しましたが、昨年はその混乱も治り、三重大学H26卒の医師が管理者となり、同時に赴任した三重大学H29卒の医師とともに、臨床+マネジメントで新たな体制のもと、組織改革、経営改善に動き始めました。次年度には三重大学H29卒の医師が長野から仲間に加わる予定で、徐々に当院の学生教育で育った世代が帰ってくるようになり、職員一同感慨に浸りながら、事業承継の責任をひしひしと感じております。地域共生社会、新たな地域医療構想、医療DXなど、日々目まぐるしく変化する社会に合わせていくとともに、我々へき地医療の最前線から、医師確保、看護師確保含めた医療介護従事者の養成に関して、より多くの三重県内の病院と連携して、三重県全体の医療介護人養成に貢献していきたいと考えております。

またいつも応援していただいております、のろ志に関しましては故、竹田寛先生の遺言を引き継ぎ、三重の医療をより良くする団体として、140名ほどが参加する組織となりました。3月7日に行われる第5回総会から、WHOから発出された地方の医師確保17の方策をもとに、県内全体の医師だけでなく看護師確保施作、行動指針を作成していく予定です。三重県全体で医師看護師確保が行えるよう貢献していきたいとメンバー一同考えております。今年もお力添えをよろしくお願ひいたします。ありがとうございました。



新春特集 年頭所感

2026年を迎えて



紀南病院 加藤 弘幸

新年あけましておめでとうございます。紀南病院の院長を拝命し、6回目のお正月を迎えることとなりました。

紀南病院の経営状況としましては、昨年、一昨年と非常に厳しい状況でありました。東紀州地域は2025年に医療人口のピークを迎えると予想されておりましたが、患者数の減少に伴う病院収入の伸び悩み、人事院勧告等による人件費の増加、などの影響を受け、早急に病院改革を行う必要性に迫られました。2026年4月の診療報酬改定で多少の収入増の見込みはあるものの厳しい状況が続くことが予想されます。紀南病院としましては近隣病院との役割分担を考え、既存の地域包括ケア病棟や回復期リハビリテーション病棟の充実を図り、急性期治療の一部を県内の高度急性期病院にお願いし、急性期治療が終わり次第当院で回復期医療をさせていただく方針で病院の存続を考えております。これらを具現化するためには、看護職員の確保やリハビリスタッフの増員が不可欠ですが地元出身者で当院の医療スタッフを充実させる事も人口減少の影響で困難となってきています。

しかしながら、今後も紀南病院は地域に求められる医療体制を提供し、この地区の中核病院としての使命を果たすべく、急性期から回復期への医療はもとより救急医療や災害時の医療にも尽力していく所存です。

三重県病院協会様からも引き続きご支援を賜りますよう、今後ともこの紀南病院をよろしくお願い申し上げます。





新春特集 年頭所感

2026年頭所感



吉田クリニック 院長
吉田 光宏

新年あけましておめでとうございます。さて、昨年の世相を象徴する漢字は【熊】でした。市街地での目撃が相次ぎ生活を脅かした一方で、上野の「熊猫（パンダ）」が中国へ返還されるという寂しいニュースもありました。この【熊】、英語では「ベア」ですが、我々医療機関にとっての「ベア」といえば、何といっても「ベースアップ」です。ベースアップ評価料の新設以来、賃上げへの対応は喫緊の課題となりましたが、物価高騰と人手不足が加速する中、経営の舵取りは困難を極めています。

一方、さる医療系サイトによる昨年の医学界を象徴する漢字が「赤・高・貧・減・苦」であったことが示す通り、今の医療現場は極めて歪な構造にあります。診療報酬が低く抑えられているために、個々の病院が必死に病床稼働率を追わざるを得ず、結果として国全体の医療費が膨らんでしまう一まさに「合成の誤謬」に陥っていると言わざるを得ません。病床を埋めなければ経営が成り立たない構造自体が、人手不足に喘ぐ現場をさらに疲弊させるという悪循環を招いています。そして2026年。私たちは、団塊の世代がすべて75歳以上となった「未踏の超後期高齢社会」を迎えていきます。生産年齢人口が急速に減少する中、医療現場はまさに逆風の真っ只中にあります。

しかし、嘆いてばかりはいられません。「窮すれば即ち変ず、変すれば即ち通ず」（『易経』）とあるように、窮があったら、そこに新しい変化が生じて来、新しい道が開けて来ます。「治し支える病院」として存続するためには、この逆風下でDXやAIの活用、ケア体制の再設計といった、たゆまぬイノベーションの創出が問われているのだと思います。

さて、2026年といえば、サッカーファンにとっては再び胸が高鳴るW杯の年です。4年前、私たちに勇気を与えてくれた「三笘の1mm」や浅野選手の劇的なゴール。あの時、最後まで諦めない姿勢が奇跡を呼ぶことを、私たちは再確認しました。「分断」ではなく「連携」という武器を手に一院で完結できない課題も、病院協会の先生方との強固なネットワークがあれば、活路を見出せると確信しています。本年も、地域医療というフィールドで泥臭く、しかし情熱を持って微力ながら走り続ける所存です。本年も変わらぬご指導、ご鞭撻のほど、何卒よろしくお願い申し上げます。





新春特集 年頭所感

令和8(2026)年の年頭所感



社会医療法人尚徳会ヨナハ丘の上病院・理事
伊佐地 秀司

新年あけましておめでとうございます。年明け早々、1月3日未明（日本時間）に報じられた米国によるベネズエラ情勢を巡る緊迫した動きは、世界の先行きに対する不安を改めて感じさせるものであり、令和8年の国際情勢がどのように推移していくのか、憂慮の念を抱かずにはいられませんでした。

本年は干支で申しますと「丙午（ひのえうま）」の年にあたります。「丙」「午」はいずれも火の性質を持つとされ、古来より丙午は火の力を象徴する年といわれてきました。そのため、火災が多い年になる、あるいは丙午生まれの女性は気性が激しいなど、さまざまな迷信が語られてきたことも事実です。実際、1966年（昭和41年）の丙午の年には、いわゆる生み控えにより出生数が大きく減少したことが知られています。本年がそのような迷信や不安に左右されることなく、穏やかで安定した一年となることを心より願うとともに、我が国の政治・社会情勢が安定し、着実に前進していくことを祈念いたします。

さて、当協会のロゴマークの説明を拝読いたしますと、「三色で描かれた三重県の地図は、医師、コ・メディカル（看護師・技術職員）、事務職員という三者の集団を表し、県内すべての病院において、これら三者が力を合わせ、円滑な病院運営を行っていくことを意味している。また、その姿は、多次の上げ馬神事において三頭の馬が天に向かって飛翔しようとする様子にも重なり、これから飛躍を目指す本協会の姿を象徴している」と説明されています。本年はまさに、このロゴマークに込められた思いのとおり、県内すべての病院が「飛翔する馬」となり、大きく前進していく一年になるものと期待しております。

監事として、私は会員病院の皆様と緊密に連携しながら、協会活動の健全性と透明性を確保し、ひいては協会の一層の発展に寄与できるよう努めてまいる所存です。三重県病院協会が本年も力強く活動を展開し、地域医療の未来を切り開いていかれますことを心より祈念申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。本年もどうぞよろしくお願ひ申し上げます。



わが町の病院

玉城町国民健康保険 玉城病院
院長 浦田 久志



だれもが安心して、笑顔(えがお)で、元気に暮らせるまちをめざして

「玉城町国民健康保険 玉城病院」

昭和31年4月 発足 (町村合併により経営移譲)

病床数 療養病床: 50床

病室 個室: 8室、2人部屋: 1室、4人部屋: 10室
合計 19室: 50床

診療科目 内科、外科、整形外科、眼科、皮膚科、リハビリテーション科、麻酔科

開設者 玉城町長 辻村 修一

管理者 院長 浦田 久志

三重県 玉城町



織田信雄の居城 田丸城跡



桜の季節: お花見最高です!!
ライトアップもあります

ほ場整備された 1,300ha の水田が広がる



両側が田んぼの一本道

郷土の偉人

村山龍平

むらやま りょうへい

1850年 - 1933年

日本の新聞経営者。朝日新聞社社主・社長、政治家。衆議院議員、貴族院議員。玉城町名誉町民第1号。



小林政太郎

こばやし まさたろう

1872年 - 1947年

18歳にして医師開業試験に合格。

1902年、柔らかいオブラートを製品化した。当時は「柔軟オブラート」と呼ばれた。



基本理念

町民の健康を支え、町民からも支えられる病院に

平成17年1月にリニューアルいたしました



春は桜が咲き誇ります

上空からの新玉城病院



受付・外来待合



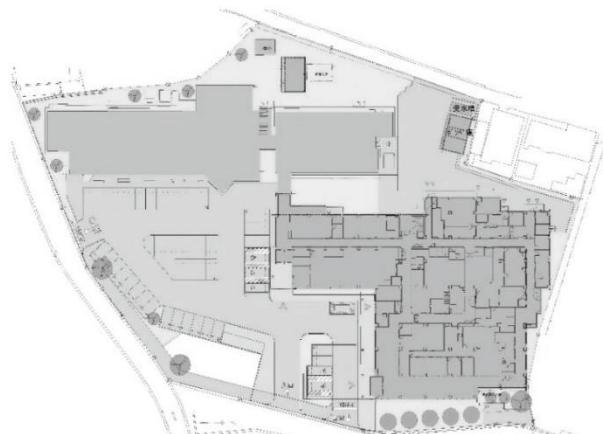
2階病棟ナースステーション(回廊式になってます)



明るく開放的なリハビリ室



病院の配置図



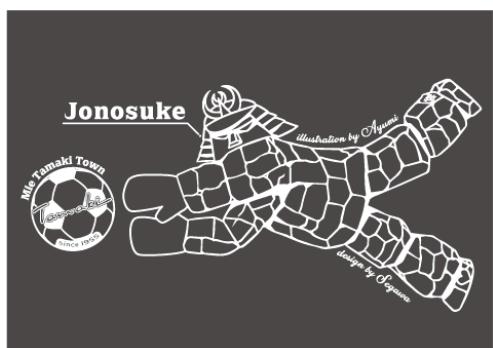
スポーツ活動

町民体育祭への参加



結果より参加することに意義があります

体を動かしたあとがメインのサッカー・フットサル



親睦の練習試合大歓迎です。(対戦チーム募集中)

親睦行事



みんなの笑顔が最高。明日への活力となるといいですね!!

消防防災訓練



物干し竿と毛布を使った担架作り

発熱外来を想定した訓練



令和8年年頭のあいさつ式



開設者の辻村修一 玉城町長も一緒に撮影



参加者全員での貴重な一枚

わが町の病院

三重北医療センターいなべ総合病院
院長 相田 直隆



病床数 220 床
一般病床

診療科 内科、消化器内科、循環器内科、呼吸器内科、血液内科
内分泌・糖尿病内科、外科、呼吸器外科、小児科、整形外科
脳神経外科、皮膚科、産婦人科、眼科、泌尿器科、麻酔科
リウマチ科、肛門外科、リハビリテーション科、耳鼻咽喉科
放射線科、救急総合診療科、脳神経内科 計 23 科

三重北医療センター いなべ総合病院の歴史

三重県最北端部に位置する当院は昭和 28 年 10 月に内科・外科・産婦人科の 3 科で開院し昭和 42 年 9 月本館・治療棟を鉄筋コンクリートに改築しました。

そして平成 14 年 9 月に新築移転を機に「いなべ総合病院」に名称を変更しました。

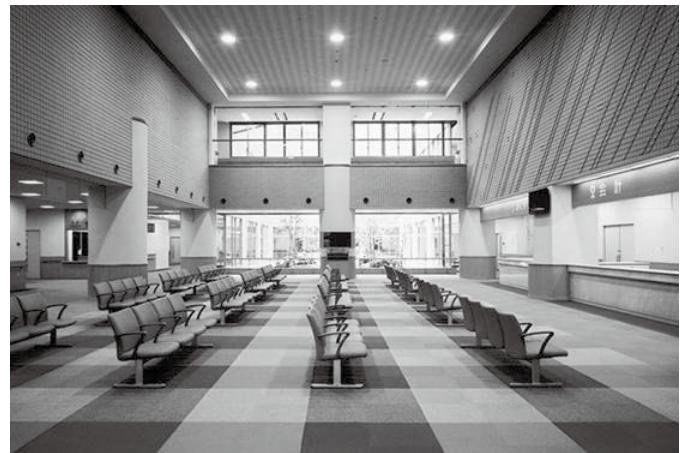
平成 29 年 4 月には診療連携の強化および診療機能の分担・集約に取り組みとして系列病院である菰野厚生病院と共に統一名称として「三重北医療センター」を付して「三重北医療センターいなべ総合病院」となり現在に至ります。



旧員弁厚生病院



平成14年10月1日移転
いなべ総合病院と名称変



吹き抜けの正面玄関ホールです

大規模災害訓練



災害本部にて各担当者から情報収集する相田院長





新人職員 ウェルカムパーティー



ヘリポートからみた病院外観



クラウドファンディングでの医師確保への取り組み



いなべ市指定天然記念物『コノハナザクラ』



自己紹介

鈴鹿回生病院
事務長 岡本 繼治



初めまして、事務長の岡本継治（つぐはる）と申します。
事務長職を拝命したのは、令和6年7月と少し以前となります。

この度、三重県病院協会様より寄稿のご依頼を受け、何かあるかと考えましたが、まずは「私を知ってもらいたい」ということで、これまでの「職歴」と「これから取り組み」についてお話しします。

私は平成2年に入職、当時の病院は鈴鹿市寺家にあり、今年で36年目です。
入職時の所属は「総務課」で庶務とシステムを担当していましたが、病院の事務の基本は「医療事務」ということで、医事課に異動となりました。医事課ではいろいろなことに取り組みましたが、オーダーリングシステム導入には苦労しました。

当時、パソコンはあまり普及していないので、職員へのパソコンの操作説明は大変でした。
例えばマウスのシングルクリック、ダブルクリック、マウスの移動…の説明などです。
今では信じられませんが、そのような時代でした…。

その後、平成13年に総務課へ異動と同時に「病院の移転」があり、この事は忘れることはできません。

私の担当は「医療機器」の購入と「物の引越し」でした。家の引越しでさえ大変なのに、病院となれば移動する物の多さ、事前運んでおく物と当日運ぶ物を分ける。また、物が所在不明にならないように、行き先ラベルの周知などなど、引越し会社と入念に打ち合わせをしました。

無事に引越しが完了した時は安堵いたしました。
その他にも、病院機能評価の受審、臨床研修医棟の建設、法人関連施設である介護老人保健施設「輝（きらり）」の建設・立ち上げなどにも携わりました。

平成19年には財務課へ異動になった頃から病院経営は厳しくなり始めました。
それは、度重なる診療報酬のマイナス改定の影響です。

今まで通りの計画ではなく、しっかりとした「事業計画」が求められるようになり、コンサルタントの協力を得ながら「事業計画」を作成しました。

また、より公共性の強い医療機関を目指して「社会医療法人の申請・承認」「地域医療支援病院の申請・認可」にも携わりました。

令和2年に人事課へ異動した時には新型コロナ感染症が流行し、職員への処遇改善のための手当や給付金対応に追われました。

また、「人事制度」の改定、「医師の働き方改革」に取り組みました。

私は振り返ると多くの方の協力を得ながら数多くの挑戦をしてきました。しかし、失敗も数多くありましたが、その経験を活かして、次の挑戦に進むことができたのは、職員の理解と協力があったからです、本当に感謝いたします。

そして、これからも挑戦を続けます。

なぜ、そこまで挑戦するのかと言いますと、以前に一緒に仕事をした方の言葉がありました。その方と病院の移転に際して患者搬送で自衛隊に協力要請を愛知県に行った時に、私は「民間病院の移転に自衛隊は協力してくれますか？」と疑問を伝えました。

その方は「たぶん無理やな」と言った後に続けて「でも挑戦しないと成功はない」と言いました。結果はダメでしたが、私は今でもその言葉を忘れません。

今後の取り組みとしましては「DX化の推進」です。

少子化に伴い、人材確保難のさらなる深刻化への対応、高齢化の進展により医療ニーズが増大・複雑化する中で「良質かつ効率的な医療提供を行う」ことを目指します。

しかしながら、DX化には「導入コスト」「セキュリティ対策」などの課題もあります。

現状の良い部分は残しつつ、目的と目標を設定し優先順位を付けて、現状把握と課題の明確化、その効果を把握しながら段階的に進めていきたいと考えています。

最後になりますが、医療業界を取り巻く環境は人材確保、医療費抑制、コスト高など非常に厳しい状況ですが、病診連携・病病連携を更に強化し、患者さんに安心・安全な医療を受けられるように努めてまいりますので、皆さま今後ともご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願ひ申し上げます。





『日日是好日をモットーに』

伊勢赤十字病院 医療社会事業課

医療ソーシャルワーカー 松葉 稚加



伊勢赤十字病院は伊勢神宮を擁する三重県伊勢市に位置しています。三重県中南勢地域における基幹病院として、地域住民のため、救急医療、高度な急性期医療の提供に努めています。また、『人道・博愛』の赤十字精神に基づき、多様な医療保健活動に取り組む赤十字病院でもあります。

当院に従事して、産休・育休期間を含め、二十数年が経ちました。入職当初は看護師として勤務しておりましたが、在宅療養支援室看護師を経て、医療ソーシャルワーカーとして勤務するようになり十年ほどが経ちました。

これまでを振り返ると、出産や子育て、またコロナ禍を経験して、働き方に対する自分自身の価値観が大きく変化したのを感じます。私が第一子を出産した時は、当院でも時短勤務制度の導入が始まったばかりの頃でした。時短勤務の希望なんて、まだまだ言い出しにくい雰囲気がありましたが、子育て支援制度や働き方改革など時代の変化による後押しもあって、時短勤務の取得は今やスタンダードとなり、ワークライフバランスを意識した多様な働き方が選択できる時代となってきたと実感しています。

私自身の子育てはそろそろ終盤というところまでできていますが、仕事をする時間も、子どもと向き合う時間も、どちらの時間も自分自身にとって譲れない大切なことで、双方の折り合いをつけるのに必死で走り続けた日々でした。仕事も子育ても中途半端に感じ、これでよかつたのか、こうした方がよいのではと自問自答することはしばしば…。日々の生活を送ることに精一杯で疲弊していました。

そんな日々の中で出会った言葉が『日日是好日』という言葉です。これは禅語の一つですが、過去を悔やんだり、未来に過度な期待を抱いたりせず、いまを精一杯生きることに努める大切さを説いたものだそうです。受けとめ方次第でいい日にも悪い日にもなる、心の持ち方一つでどんな日も『好日』に変えられるという教えです。そんなに簡単に切り替えられることばかりではないのが現実ではありますが、こうした考えた方で自分を楽にしてあげてもいいのかなと思うことができました。毎日大変だと思う当たり前の日々を過ごせることこそが実は幸せなのかもしれないと思うようになりました。

今日まで継続して働くことができたのは、家族の支えや職場の理解、温かい仲間など多くのサポートがあったおかげです。日々の感謝を忘れずに、かけがえのない一日一日を大切に過ごしていきたいと思います。





東紀州地域の現状と当院の果たす役割について

医療法人 紀南会 熊野病院
地域連携室（認知症疾患医療センター）
今西 裕隆



当院は、東紀州地域エリアの精神科病院で、昭和35年に開院し、昨年65周年を迎え、サテライトの「尾鷲診療所」、また、介護老人保健施設「オレンジロードむつみ苑」、障害者相談事業所「オランジュ」、グループホーム「熊野の里」などを併設しております。エリア唯一の精神科ということもあり、入院・外来問わず、様々な精神科の医療ニーズに対応しております。

また、和歌山県、奈良県との県境が近い立地でもあり、県越市町からの相談、受診も多くあります。人口減少は大幅に進むなか、65歳以上高齢者の数は、すでにピークを過ぎ、少しずつ減少に転じる見込みであるが、高齢化率は年々上昇しており、三重県の平均からも大きく上回っており、数年先の超高齢化社会を先取りしている状況にあるといえます。

介護サービス費等は年々増加の一途を続けており、一方で医療・介護の働き手不足の問題はより一層深刻化してきている。

山間部、一部の海岸部においても限界集落が点在しており、独居高齢者、高齢者夫婦、認認介護の世帯も増え、加えて家族の支援がなかなか得られない世帯も増えており、家族を代行する業務等ケアマネへの業務負担の増加やそもそも思うようにヘルパー支援等介護サービスが行き届かない状況もある。

医療においても医師の高齢化や医師不足もあり、各地域の診療所も閉鎖を余儀なくされ、公的機関からのサポート、訪問診療、訪問看護により、何とか今のところは維持されている現状にある。

当院においても人材確保が十分とは言えないが、地域包括ケアの一員を担う機関の役割として、使える資源は少なくとも、小さな地域ならではの顔の見える関係性をフルに活用し、小回りのきく密な連携をより強化することで、認知症等、特に高齢者の医療ニーズになるべく早期に対応していくことを意識してすすめている。

平成25年に三重県より認知症の専門医療機関としての東紀州圏域の認知症疾患医療センターとして位置づけられ、さらに地域の方々や関係機関からの認知症の専門医療相談、早期の鑑別診断、治療方針の選定、早期のスムーズな介護サービス導入への支援、緊急時の入院対応など途切れぬ支援の構築を進めてきている。

私の所属する地域連携室においてもその前線窓口として、院内連携、病病連携、病診連携、関係各所とのネットワーク構築をより強固なものとなるよう、個々のケースワークを丁寧に積み重ねることを通じて良好な関係性の構築に努めています。

最後に、当院の理念である“心の病は心で治す” “人のケアは人でしかできない”を心に留め、“障害があってもなくても、認知症があってもなくても住み慣れた地域で安心して暮らしていける”そんな地域となるよう微力ながらチーム一丸となって取り組んでいきたいと思います。





身寄りがない高齢者との関わりについて

尾鷲総合病院 総務課 地域連携係・医療事務係
係長 松井 真路



機関誌『三重県病院協会会報No.310号』へのご寄稿について（依頼）という文章をいただき、その文章の中に寄稿内容：内容は自由です。（例）職場の自慢、日頃の活動や苦労話、趣味・エッセイ・旅行・サークル活動などとなっていたので、職場の事ではなく趣味・エッセイ・旅行・サークル活動など過去のペンリレーを参考にしながら、おもしろおかしく書こうかな？と思いましたが、過去のペンリレーを見た瞬間、趣味・エッセイ・旅行・サークル活動などを書いている方が殆どいない。（みなさんお仕事がメイン）

これ私が書いていいの？MSWが書いた方がいいのかな？でも、MSWは忙しそうに病棟へ行き、時間がない時間がないと走り回っている・・・。

というわけで、私がお仕事の事を書くことになった訳であります。

尾鷲市の高齢化率は2020年に45%となり、高齢単身世帯が増加していることもあり、入院時に入院誓約書の保証人欄の記載を求めて身寄りがない、または家族と疎遠なので記載してもらえないということがあります。このような患者さんが入院中にお亡くなりになった場合、誰がお引き取りになるのだろうか、誰が入院費をお支払いするのだろうか、これまで福祉や介護関係での介入がなかったのだろうかなど入院時に患者さんのこれまでの背景、これから的生活など相談支援の出発点が病院になるケースがあり看護師・MSW、医療事務係で議論することがあります。

近年、連帯保証人は当社が連帯保証人となります、未収金は当社がお支払いをいたします、未収金の回収は当社が行いますというような連帯保証人代行サービスの導入の検討をしてみてはいかがでしょうかと業者の方々からの依頼が増えてきました。

連帯保証人や未収金の事でMSWや医療事務係は相当な時間をかけていることから、代行サービスの導入は魅力的ではございますが、病院経営が厳しいなか、代行サービスへの費用をかけることは今のところ難しいと考えます。

身寄りがない高齢者の方々にとって、今後どのようなことができるのか日々考えていましたところ、12月15日に開かれた社会保障審議会福祉部会では、頼れる身寄りがない高齢者らの日常生活や死後事務などを一体的に支える新たな制度の創設を今後していくとのことありました。

入院時に患者さんのこれまでの背景、これから的生活など相談支援の出発点が病院ではなく、日頃から支える仕組みが実現すれば少しは看護師・MSWや医療事務係が議論していた問題が解決されるのではないかと期待しています。



📷 フォト・ギャラリー

三重はふるさと 空中散歩

松阪市民病院名誉院長 小倉 嘉文



鈴鹿の子安觀音寺 2025. 10. 17



二見 夫婦岩の夜明け 1 2025. 11. 23



二見 夫婦岩の夜明け 2 2025. 11. 23



津 阿漕浦海岸の日の出 2025. 12. 17

受賞おめでとうございます

令和7年度三重県福祉関係功労表彰

熊野病院 看護部長



前原 太 様

令和7年度看護関係功労者知事表彰

松阪厚生病院 看護師



河野 佳代 様

総合心療センターひなが 准看護師



山口 栄美子 様

総合心療センターひなが 准看護師



鎌田 孝子 様



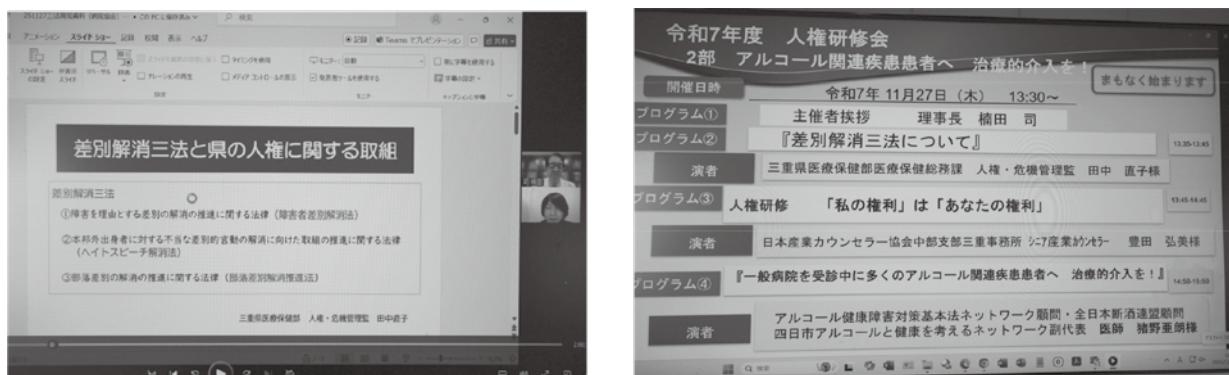
報告

三重県病院協会だより

開催日	事項	出席
第79回定例理事会 令和7年11月18日	<p>1. 三重県からの報告 病院の面会ルールに係るアンケート結果について 保健部感染対策課 課長 岩崎雄也様</p> <p>2. 理事長報告 薬剤師確保計画推進会議、三重県医療審議会、 地域医療介護総合確保懇話会、地域医療対策協議会より報告</p> <p>3. 各種委員会出席理事より報告 三重県性暴力の根絶を目指す条例検討懇話会 下村理事 災害対策委員会 アマチュア無線関係 堂本理事 三重県在宅医療推進懇話会 東口理事 三重県社会福祉審議会高齢者福祉専門分科会 志田副理事長</p> <p>4. 情報交換・その他</p>	理事19名 監事2名

令和7年度 事業報告（研修事業）

事業名	開催年月日	開催方法	講演テーマ	講師	参加人数
人権研修会	R7. 11. 27	オンライン (zoom)	『差別解消三法について』	三重県医療保健部 田中直子 様	101名
			「私の権利」は『あなたの権利』	日本産業カウンセラー 協会 中川真理子様	
			『一般病院を受診中の多くのアルコール関連疾患患者へ』～治療介入を～	医師 猪野亞朗 先生	



次回の人権研修会・医療事務研修会お知らせ

医療事務研修のテーマは『令和8年度診療報酬改定と令和7年度補正予算のポイント』を予定

日時：令和8年2月26日（木）



報告

三重県精神科病院会だより

年月日	会議名	出席	摘要
12月19日	12月例会 プラザ洞津	16病院	<p>1. 三重県等からの報告・相談について 裁判所技官の募集について 県福祉事務所 精神科嘱託医推薦について</p> <p>2. 第16回三重精神科医療フォーラムについて 概要、決算報告</p> <p>3. 第17回三重精神科医療フォーラムについて 担当病院：北勢病院、多度あやめ病院、 大仲さつき病院、東員病院 大会長病院：北勢病院 院長 若松 昇先生</p> <p>4. 各種委員会、審査会報告</p> <p>5. 情報交換</p> <p>12月例会終了後 令和7年度懇親会 11名出席</p>





建築設備の設計・提案・施工・保守までワンストップでご提供する
トータルサポートの省エネエンジニアリング会社



ダイキンエアテクノ株式会社

空調更新のご相談、空調に関するお困りごとは

エアテクノ

検索

<https://www.daikin-at.co.jp/>

■津営業所 〒514-0834 三重県津市大倉20-32 TEL: 059-224-7751 FAX: 059-224-7755



快適が好きです。

親しみやすさを感じさせるユニフォームは癒しを与えてくれる



明るい励ましの声が響いてくるような、温かな絆のシンボルとも言えるユニフォーム。機能的な先進素材と、軽快で動きやすいデザインが理想の協働環境をサポートします。



KURA-UNI CORPORATION

クラユニ

ユニフォームで人とコミュニケーション

株式会社 クラユニコーポレーション

(旧社名 株式会社 倉田白衣)

あらゆるニーズに、確かな「ユニフォーム力」でお応えします。

★おかげさまで、地域に愛され
て110年あまり。
ユニフォームのことなら何でも
ご相談ください！

□津本社 津市中央 12-1 TEL059-226-8911 FAX059-225-8911
□四日市支店 四日市市諏訪町 12-1 TEL059-351-8911 FAX059-351-8910
□伊勢支店 伊勢市宮町 1-9-20 TEL0596-24-8911 FAX0596-24-8583
□名古屋支店 名古屋市東区飯田町 47 TEL052-931-8910 FAX052-931-8919
●ホームページ <https://www.kurauni.co.jp> ●FreeDial 0120-11-8911

NEWS! 各スポーツブランドのメディカルユニフォームに加え、高級ドクターコート等も取扱っています。

唯一無二の住宅建築



オカモトハウジングは、世界に一つだけしかない、住まい手の邸宅を造る為に存在しています。
私達の目的は、ただ一つ「お客様への住宅を自分たちも住んでみたいと思う、素敵な建物にすること」それ以外ありません。その為には、プロとして建築の知識と技術を日々高め、そしてそれらを惜しむ事無くお客様の住宅建築に注ぎ込んで行きます。

OKAMOTO HOUSING

有限会社 オカモトハウジング

〒510-8034 三重県四日市市大矢知町1638-1
TEL 059-364-2033 FAX 059-366-2778
<https://www.okamotohousing.com>

名古屋営業所
愛知県名古屋市名東区よもぎ台2-808
コーポ名峰101号室





■クリーンサービス



■リニューアル工事



■設備運転・保守管理



■環境衛生管理

喜びは、 お客様と共に。

Sharing joy with our customers.

60年近くの経験と専門知識に裏づけされた、当社
独自の総合コンサルティングサービスにより、建物の
資産価値を最適な状態で保ち、高めて参ります。

プロパティマネジメント
Property Management

PM

ファシリティマネジメント
Facility Management

FM

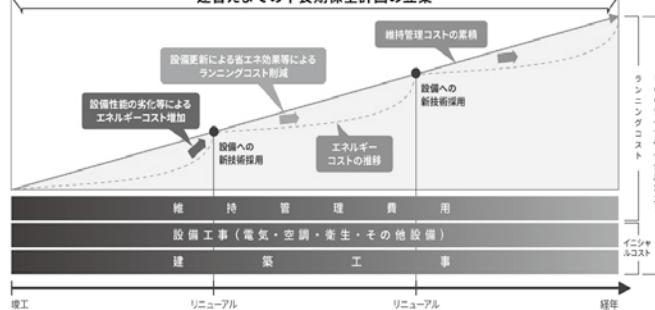
ビルマネジメント
Building Management

BM

ビルメンテナンス
Building Maintenance

BM

建替えまでの中長期保全計画の立案



三重営業所



〒514-0009

三重県津市羽所町 388 番地

津三交ビルディング 7階

TEL 059-253-1177

FAX 059-253-1178

担当：松田

本社

〒467-0842

愛知県名古屋市瑞穂区妙音通 4 丁目 40 番地 TS 新瑞ビル

TEL 052-875-6300 FAX 052-846-8510

その他拠点

栄オフィス、東京支店、浜松営業所、大阪オフィス 他



タイガー総業株式会社

<https://www.tiger-s.co.jp>



委託業者の 言いなりにSTOP！

厨房運営
30年

ナリコマのクックチルで
「厨房経費の削減」を実現

味・人材・コスト課題のすべてをサポートいたします



こんな お悩み ありませんか？



人材不足に困っている

- ✓ 早番・遅番の人材が足りない
- ✓ 求人を募集しても、応募が来ない
- ✓ 採用してもすぐに辞めてしまう



コストが上昇し続けていて
困っている

- ✓ 人件費（最低賃金）の上昇
- ✓ 水道光熱費・食材費の高騰
- ✓ 給食委託費の値上げを迫られている



品質が安定しなくて
困っている

- ✓ 調理師によって味が変わってしまう
- ✓ 介護食のとろみや粘度が安定しない
- ✓ 暖かい料理が提供できない

その悩み

ナリコマのニュークックチルにおまかせください！



ナリコマ エンタープライズ

(株)ナリコマエンタープライズ 名古屋営業所
〒450-0003 愛知県名古屋市中村区名駅南3-6-6
名駅ユタカビル9階A号室

TEL 052-462-8122 FAX 052-462-8123



三重県医薬品卸業協会

これからの医業経営へ、「信頼」で結びたい。



医療・保健・介護・福祉施設が抱えるあらゆる課題を、
資格認定されたコンサルタントが解決します。

認定登録 医業経営コンサルタントは、医業経営に携わる方々が直面する課題に
的確・迅速に対応するため、所定の継続研修を履修し、常に資質の向上を図っています。

JAHMC
Japan Association of Healthcare Management Consultants
公益社団法人 日本医業経営コンサルタント協会

支部 〒511-0834 三重県桑名市大福406-1 (税理士法人中央総研内) TEL:0594-23-2448 FAX:0594-23-3303
本部 〒102-0075 東京都千代田区三番町9-15 ホスピタルプラザ5階 TEL 03-5275-6996 FAX 03-5275-6991 <http://www.jahmc.or.jp>



三 重 県 病 院 協 会 会 報

令和 8 年 1 月 NO.310

発 行 一般社団法人 三重県病院協会

〒514-0009 津市羽所町 514 番地 サンヒルズ内

Tel.059-223-2744 E-mail:sshenyi896@gmail.com

印 刷 伊藤印刷株式会社